

平城宮跡第150次発掘調査現地説明会資料

— 第一次朝集殿推定地の調査 —

1983年7月2日 奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部
采沢 芽樹

はじめに

推定第一次大極殿地域と推定第一次朝堂院地域（以下、推定を省略）については、第27次調査（1965年度）以降あわせて16回におよぶ調査を実施してきた。その結果、両地域の変遷過程を知ることができるようになった。これに続いて第一次朝集殿推定地の解明を目的に、昨年度冬季に第146次調査を行ったが、東朝集殿は確認できなかった。そこで今回は、第146次調査区の南で、東朝集殿の有無とこの地区の性格を明らかにすることを主目的に、面積約1700㎡にわたって発掘調査した。

1. 遺構

検出した遺構は、奈良時代の築地塀1条、築地塀の下をくぐる石組暗渠1基、雨落溝2条、素掘り溝2条、井戸1基、土塋1基、その他古墳時代の遺構がある。

＊奈良時代の遺構 整地土と切合関係からA～Eの5期にわけることができる。

A期 素掘りの溝SD3765が南北に流れる。幅約1.4m、深さ約0.7mで、3層の堆積が認められた。

B期 井戸SE10を掘る。一辺約2.4mの隅丸方形の掘形で、藤原宮式の軒丸瓦と軒平瓦が出土した。

C期 南北に築地塀SA01を築く。西側に幅約0.5mの雨落溝SD02aがあり、一部に木樋が残っている。石組暗渠SX03を構築し、東に排水する。この暗渠は厚さ約0.15mの凝灰岩を用い、内法で幅約0.5m、高さ約0.3m、東西長は約2.7m以上である。なお石材は、奈良市地獄谷で産出する凝灰岩とみられる。

D期 灰褐色土で整地した後、築地塀の東に、幅約2.0m、深さ約0.5mの南北溝SD04を掘る。溝の堆積は上下2層認められた。

E期 築地塀を改作するとともに、雨落溝SD02aを約0.3m東に寄せ、雨落溝SD02bにつけかえる。これに伴い、石組暗渠の北側石を弧状に打ち欠いて、南流する水の一部を石組暗渠で東に排水する。さらに南では、調査区外にのびる。

以上A～Eの5期は、これまでの発掘調査の結果を参考にすれば、次のように位置づけることができる。A期 奈良時代初頭で、第一次大極殿が創建され、第一次朝堂院の建設前の時期。溝SD3765は、この時期における宮中央部を南北に流れる基幹排水路である。B期 奈良時代前半、恭仁京に遷都する前と推定される。溝SD3765を埋めため、第一次朝堂院を造営した時期。C期 奈良時代後半で第一次大極殿地域を大改造し、朝堂院を区画する塀を築地に改めた時期。平城京遷都後と推定される。D・E期 奈良時代末。なおE期は、溝SD02bの出土遺物がないが、整地層との関係から平城上皇の時代に下がる可能性がある。

＊古墳時代の遺構 掘立柱建物1棟、溝1条、井戸1基、土塋7基がある。掘立柱建物SB05は、方形に近い柱掘形を持ち、3間×3間、柱間が約1.6mである。平城宮の方位に比べる

と大きく振れているが、これまでに確認した周辺の遺構の時期などによると、5～6世紀のものと思われる。溝SD08からは5世紀の土師器が、また井戸SE07と土塋SK06からは6世紀の須恵器が出土した。

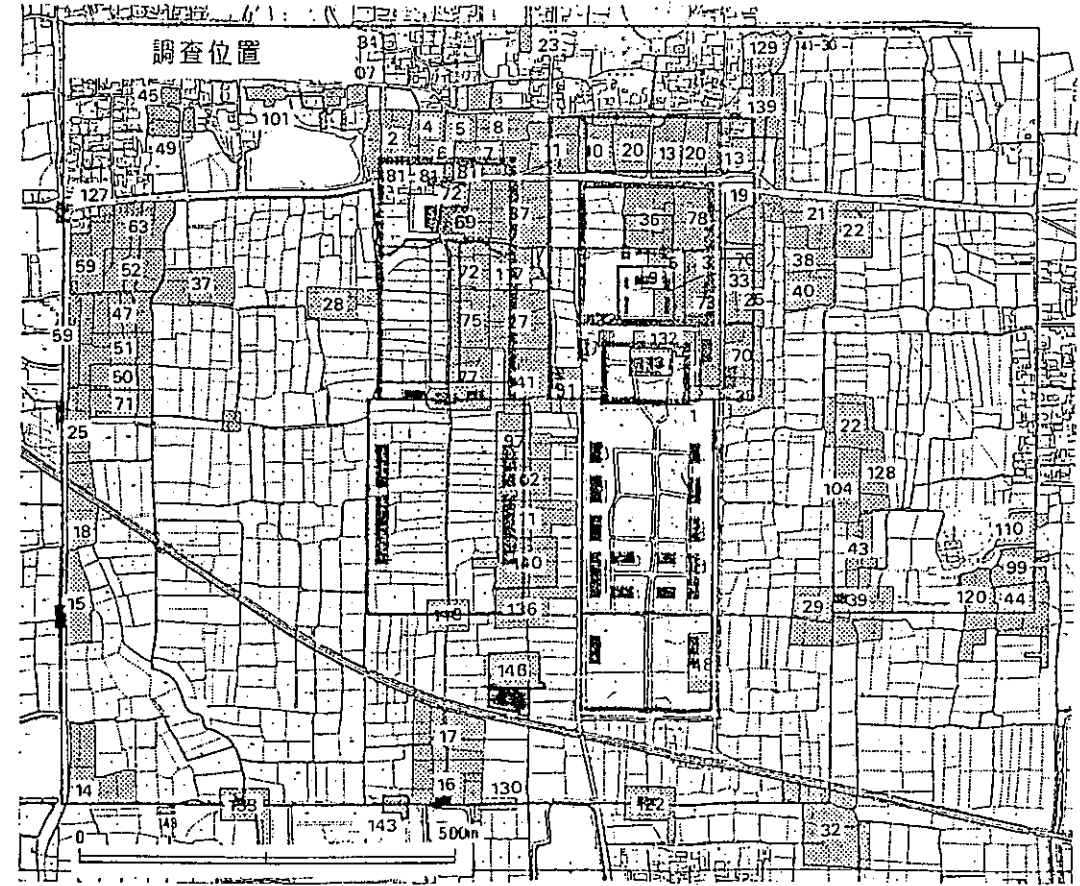
2. 遺物

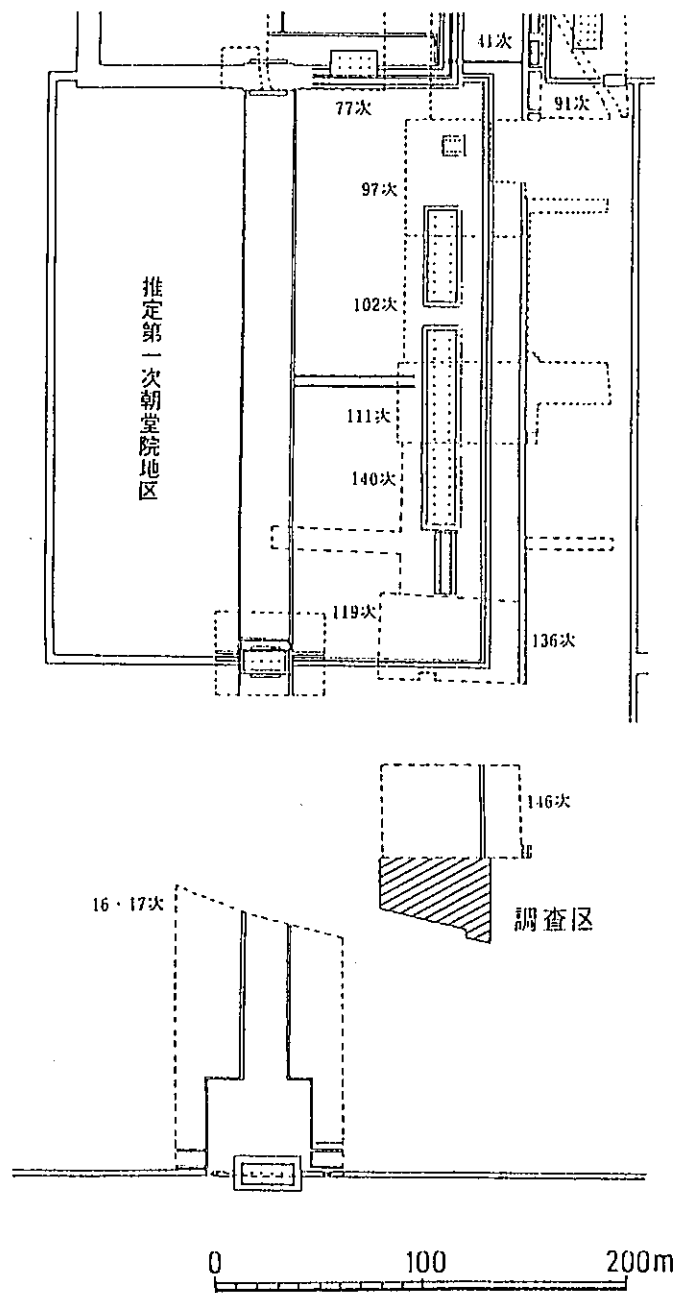
＊奈良時代の遺物 土器や瓦の出土総量は少ない。瓦では、築地塀の近くで比較的多く出土した。井戸SE10で軒丸瓦（G282）と軒平瓦（6641）が出土している。

＊古墳時代の遺物 溝や土塋から、5～6世紀の土器が出土した。

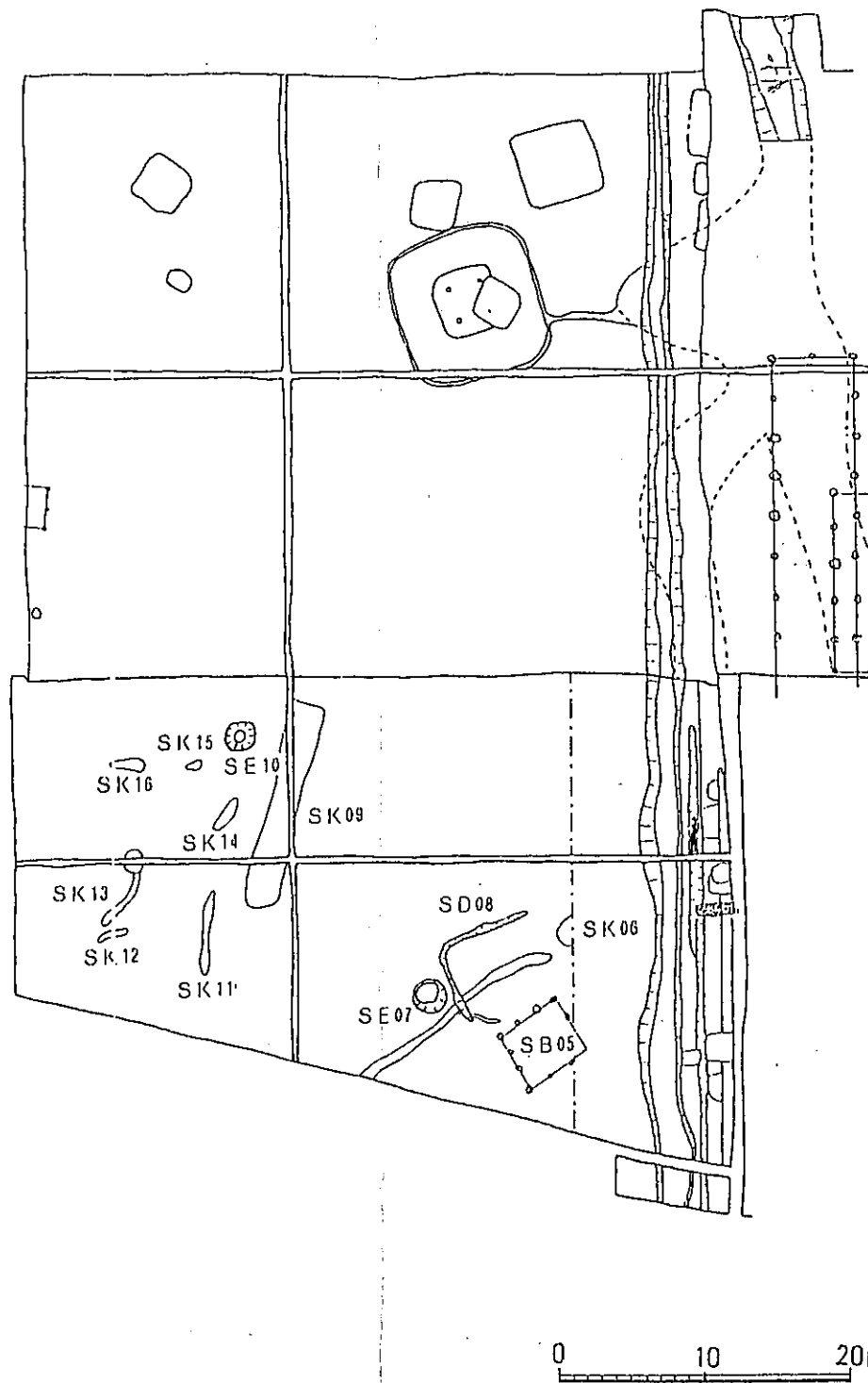
3. まとめ

- (1) 本調査区内にも、東朝集殿に相当する遺構はなかった。
- (2) しかし、奈良時代後半に、第一次朝堂院の東側の南北塀を延長して、朝集殿推定地を囲む築地塀を構築したことが明らかになったことは重要な成果である。
- (3) 本調査区内にも、古墳時代の集落が及んでいたことが判明した。

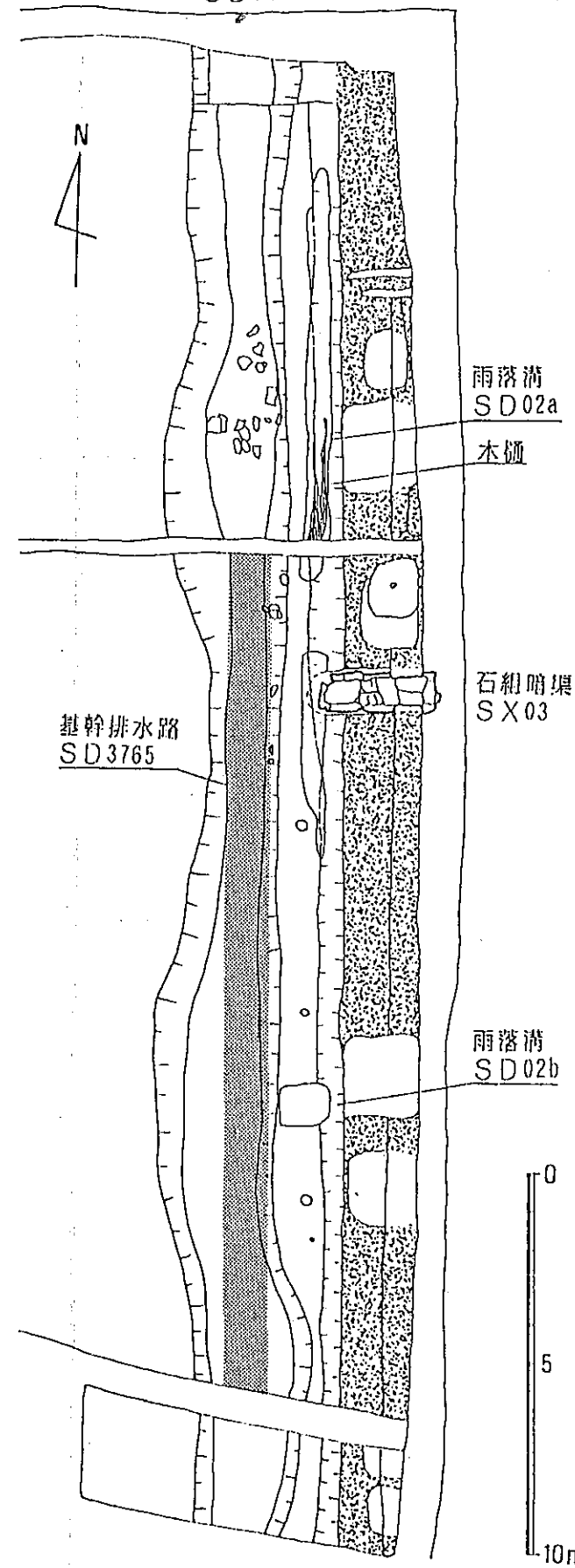




推定第一次朝堂院地区の調査経過

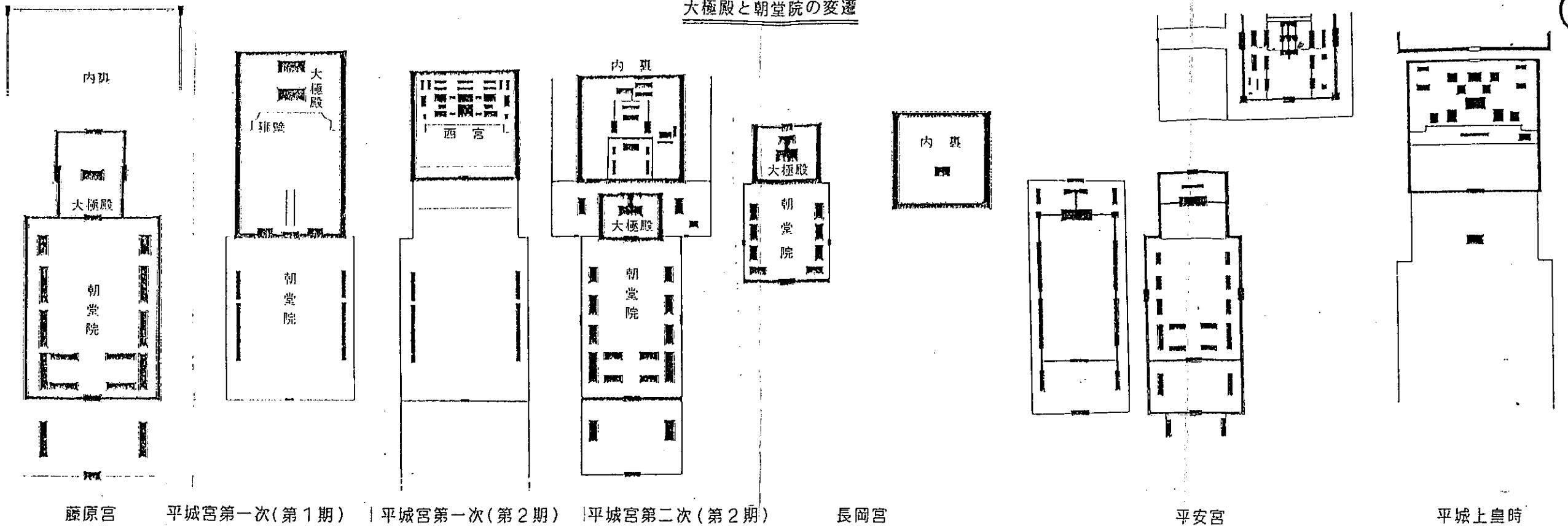


第146次と第150次の遺構



第150次市平の遺構

大極殿と朝堂院の変遷



第 146次出土遺物

